２０２４年7月２８日（日）

老球の細道８１６

「オラ！　スペインへ　ピカソの視点　」⑧

・・・ユーロバスケットボールツアー紀行〈Ⅲ〉・・・

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

出発前から心配していたことの中にインフルエンザもあった。１月に入ってから咳が止まらず１ヶ月間微熱状態が続いていた。学校でも生徒たちがインフルエンザに罹患し、ひょっとすると私まで感染してしまうのではないかと心配だった。せっかくのスペインツアー、直前になってインフルエンザで行けなくなった、または現地で罹患したなんていったら孫の代まで後悔が続く。今までインフルエンザとは無縁であったが、度重なる体調不良でインフルエンザ幻に負けてしまいそうだった。主治医の松井先生から予防に「タミフル」を飲むようにとアドバイスを受け、それを守り、結果的に事なきを得た。

旅行中に同行した人から「先生、スペインはスペイン風邪（インフルエンザ）で有名なところですから注意してください」と言われた。どこにでも間違った知識で、平然と他人に忠告する人たちがいる。どこでも真実を知らない人たちは自信満々である。

第一次世界大戦時に、ヨーロッパではインフルエンザが大流行し３０００万人を死に追いやった。戦争で亡くなった兵士よりインフルエンザで亡くなった兵士の方が多かったので戦争が終結したと言われている。このインフルエンザを後に「スペイン風邪」と名付けたが、実はスペインが発祥の地ではない。

当時、戦争している国は情報管制が敷かれ、自国の不利な情報は発信できなかった。戦争に参加していなかったスペインは自由に情報を流せた。だから、ヨーロッパでインフルエンザが流行して死者が多数になっていることを、スペインではニュースで流せることができた。そのことから、この当時のインフルエンザを「スペイン風邪」と称するようになったのである。蘊蓄を語ってしまってすみません。

【２０１４年　２月８日（土）午前】

今日は観光からスタート。ホテルから中世時代の遺跡や建築物を眺めて「ピカソ美術館」に向かった。ドイツやチェコでもそうであったが宗教に関連する石造の教会や古城のスケールの大きさはいつも感心する。何百年もかけて造り上げる息の長さは凄い。

マラガはピカソの生誕地である。ピカソ（１８８１～１９７３）は生涯で１万点を超える油絵・デッサンを残し、１０万点に及ぶ版画、その他数百点の彫刻や陶器作品を制作するなど、非常に多作な芸術家としてギネス世界記録にも登録されている。「キュービズム」と呼ばれる画法で異なる複数の視点からとらえた物体の形を一つの画面に描写し、断片化された平面として再構成するピカソ独特の表現方法を確立した。凡人には理解できない。

館内の説明書にピカソの主張なるものが書かれてあった。それによると「みんなの見ていないところへ眼を向ける」「自分の主義主張を絵を通して気づかせる」。ピカソは誰もが眼を向けていないところに着目し、誰も考えていないことを発見しトライする。まさにコーチの仕事にも相通ずるところがあるのではないか。このようなことを気づかせてくれるのが美術であり、文学であり、音楽の芸術の世界である。

私はバスケット関係の旅行に出ると必ず近隣の美術館を訪れる。美しいものを眺め、表現力や創造性で満ちた作品を眺めながら、コーチに必要な感性が高まればと願う。〈続く〉